

〈研究・調査報告〉

災害時に備え平時から地域母子との顔の見える関係づくり ～本学で開催されるパパ・ママクラスを通して～

佐々木美喜 ・ 清水 清美 ・ 宮澤 純子 ・ 大野 佳子
山田万希子 ・ 高田 良子 ・ 種 恵理子 ・ 飯島 亜樹
柚山香世子 ・ 志賀 亮太 ・ 横井 悠加 ・ 岩田 浩子

【要旨】

目的：本学で開催されるパパ・ママクラスを通して参加者の親しみやすさ、思いなど本学に対するイメージの変化の有無、変化があるとすればどのような内容の変化があったのか、またイメージの変化が顔の見える関係づくりに役立つかを明らかにした。

方法：本学で開催されるパパ・ママクラスに参加し、本研究の同意を得た母親5名のインタビューデータとパパ・ママクラス終了後に毎回実施されるアンケートの自由記載のデータを質的記述的に分析した。

結果：パパ・ママクラスに参加する前の大学に対するイメージ・思いは、【入りにくい場である】【国際的である】【大学の環境が整っている】【身近に感じている】という4つのカテゴリから構成されていた。パパ・ママクラス参加後の大学に対するイメージ・思いは、【体験を通してイメージが変わった】【知ることによってイメージが変わった】【今後も大学とつながりたい】という3つのカテゴリから構成され本学に対するイメージが変化していた。

結論：パパ・ママクラスへの参加を通して、本学に対するイメージ・思いの変化がみられた。参加者の本学に持つイメージ・思いを変え、顔の見える関係づくりを行うためには、参加者と本学教職員・学生との間で、「人」や「物・場所」を通して実際に関わることが重要であることがわかった。

キーワード：災害時、地域母子、顔の見える関係づくり

I. はじめに

昨年度、筆者らは学長所管研究奨励研究（2017）で、大学内部、および大学周辺地域の行政関係者らへのインタビューを通して、災害時の母子支援における本学の役割について明らかにした。その結果、①平時から利用者と顔の見える関係であってはお互いに支援に結びつく。②平時から協力団体と顔の見える連携を図り、訓練する。③支援の内容について明確化する。

④若い力を活用することで、利用者の自助力や共助力を高めることが重要である、という示唆を得た。また、越田（2017）は、災害時に母子は弱者集団であり災害時における母子保健活動について、日常の地域での母子保健活動を通したネットワークの構築や、地域での住民相互の互助的つながりが発災時の危機管理に影響すると述べている。さらに、村山ら（2004）は、地域母子活動の継続・発展の共通要因として、関係者間での意思疎通の促進、住民や住民組織の積極的な関わり、マンパワーの確保ということを明らかにしている。

これらのことから、災害時に本学が母子支援を行う役割を果たすためには、平時から利用者、すなわち母子と積極的に関わりを持ち、母子と大学教職員、および学生がお互いに顔の見える関係づくりを継続的に行うことが重要であると考えた。また、これらの関係性を築く過程で、本学が災害時に行う支援内容について伝えること、学生らの若い力を活用しながら活動を行うことで、最終的に本学と利用者、お互いに顔の見える関係づくりの他、本学の災害時の役割理解、利用者の災害に対する自助力や共助力の意識改革が促されると思われる。

そこで本研究では、東金市が後援し本学構内で本学の教員が4回開催しているパパ・ママクラス（以下、クラスと略す）への参加が、利用者である母子と本学の教職員、および学生との顔の見える関係性を構築する方法の1つになるのではないかと考えた。本学で開催されるクラスへの参加を通して、母親らに本学の場所や雰囲気、大学の教員・学生について知ってもらうことができ、これらの活動を通して母親らは本学の物理的・人的環境に直に接し理解を深めることができると思われる。さらに、教員や学生も母親らと接することでお互いを知り、顔の見える関係づくりができるのではないかと考えた。このようにクラスへの参加を通して顔の見える関係性を構築することができれば、災害時に効果的な母子支援を実践することが可能になるとと思われる。

以上のことから本研究では、クラスへの参加を通して利用者の本学に対するイメージや親しみやすさ、思いなど変化の有無、変化があるとすればどのような内容の変化があったのか、またそのことが顔の見える関係づくりに役立つかを明らかにすることを目的とした。

本研究の成果は、本学で開催されるクラスへの参加が、利用者と主催者の顔の見える関係づくりを行う手段となりえるのかを明らかにすることにより、利用者との関係性構築の方法について考える一助となると考える。

Ⅱ．方 法

1. 研究デザイン

質的記述的研究デザイン

2. 研究参加者

1) 研究参加者の条件と人数

本学で開催したクラスに参加し、本研究の同意を得た者 5 名。

3. データ収集期間

2018 年 10 月 3 日～2018 年 11 月 17 日

4. データ収集方法

1) 半構成的グループ面接法

(1) 参加者が小さい子ども連れであること、個別に時間を設定することが難しいこと、集団でクラスに参加した後で研究参加者同士がある程度打ち解けている状態であることから、グループ面接法とした。第 4 回クラス終了後 30～60 分程度、インタビューガイドを用いてグループインタビューを実施した。大学に対するイメージや親しみやすさなどの関係性の変化に着目する本研究では、イメージ変化の有無、変化の要因やプロセスを捉えられるように、基本的には自由な語りを妨げない態度で話を聞くように心がけた。また、一部の参加者に発言が偏らないように適宜ファシリテートした。

(2) 研究参加者の属性を把握するため、年齢層、こどもの数と年齢を聞いた。

(3) 子どもを連れての参加となるため、インタビュー中は託児者を複数名配置し、子どもの安全を保障した。また、子どもと一緒にインタビューに参加することも可能であることを伝えた。

(4) インタビュー内容の録音の許可を研究参加者全員に得た。

2) アンケート調査

クラス終了後に毎回実施しているアンケートの自由記載のデータを使用した。

5. データ分析方法

以下のステップを踏んでデータを分析した。

1) 面接が終了した後、順次録音した面接内容と面接の際に観察したことを加えて逐語録に起こした。さらに、アンケート調査の自由記載の内容を記述した。

2) 逐語録・自由記載の内容を精読して、クラスの参加前後で、大学に対するイメージや親しみやすさ、思いの変化に関連する文脈を抽出し、研究参加者の言葉を生かしてコーディングした。研究参加者間のコードの類似したもの同士を集めカテゴリー化し、それらを簡潔に表すテーマを付けて整理した。分析過程では、質的研究の専門家のスーパーバイズを受けることにより、データ分析の妥当性を確保した。

Ⅲ. 倫理的配慮

城西国際大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：03W180041）。研究への参加意思を示した研究参加者に対し、面接前に口頭と文章で研究参加への意志を再度確認後、研究参加依頼書を用いて説明した。研究参加は自由意志であること、研究参加への拒否権（いつでも自由に研究参加を辞退することができること、回答の拒否や面接中の録音の中止が出来ること、その場合一切の不利益を生じないこと、個人の評価と無関係であること）、プライバシーの厳守、及び個人情報保護、研究結果の公表方法（研究結果を母性・助産系学会、災害学会等で発表する予定であること）などについて説明した。研究参加への同意は、研究への参加への同意書への署名、及び必要事項の記入によって確認した。

Ⅳ. 結 果

1. 研究参加者の背景

研究参加者（以下、参加者と略す）は20代から30代の女性5名、仕事を持っているものは1名であり育児休業中、他は主婦であった。子どもは5か月から2歳で7名であった（表1参照）。

表1 研究参加者の背景

参加者	年齢	子どもの年齢	就業の有無
A	20代	9か月	主婦
B	30代	2歳	主婦
C	20代	10か月	主婦
D	30代	2歳、5か月	育休中
E	30代	1歳、5か月	主婦

2. クラス参加前・後の大学に対するイメージ・思いについて

本研究では、2つのテーマ、7つのカテゴリーと17のサブカテゴリー、59のコードが見いだされた。（表2参照）。

表2 カテゴリー表

テーマ (2)	カテゴリー (7)	サブカテゴリー (17)	コード (59)
クラス参加前の大学に対する イメージ・思いについて	入りにくい場である	場所・構造的に入りにくい	・いつも歩いているところにあるわけではない ・車で来なければ入れない ・街中にあるわけではないので、なかなか(入りづらい) ・入りづらかった ・車で囲まれているので中が見えず、入口が入りづらい雰囲気だ
		自分は対象外である	・大学なので入れない ・学生以外は立ち入れない所だ ・学生が多く、一般人は入れないと思っていた
		大学を訪れる機会がない	・来る機会がない所だ ・行ってみなかったけど、なかなか今までは機会がなかった ・きっかけが無いので来る機会がない場所だ
		入って良いのかわからない	・入ってみたいけど入って良いのかわからなかった ・入って良いのかわからない
		子ども連れで来る場所ではない	・子連れだと行きにくい ・子どもがうるさくて迷惑がかる
		意識にない	・想像がつかない ・あまりよく知らない
		国際的である	・留学生が多い ・外国人の学生が多い
		大学の環境が整っている	・きれい ・明るい ・広い
		身近に感じている	・職場にインターンシップで本学の学生が来るので身近に感じている
クラス参加後に変化した大学に 対するイメージ・思いについて	体験を通してイメージが変わった	大学の環境は思っていた以上に整っていた	・とてもきれいで広い ・思ったよりもすごく広い ・きれいで明るく広いキャンパスだ ・きれいな建物だと思った ・学内もきれいで過ごしやすい ・道が広く散歩しやすい ・バリアフリーが充実していた ・施設も利用しやすかった (トイレ・エレベーター・室内など) ・赤ちゃん向けのスペースがあってびっくりした
		学生・教員の優しさ、頑張りを実感した	・学生が優しく対応してくれ、頑張っているなと思った ・学生と触れ合いことができとても良かった ・素敵な職員の方や学生さんたちと関わることができ、とても楽しい空間でした ・スタッフが子どもにやさしく居心地が良い ・(これまで)城西国際の学生さんとふれあう機会がなかったの、(学生が)気さくでびっくりした ・もう少し固いかと思ったが、柔らかい印象の人が多かった
		大学に来やすくなった	・思っているより来やすかった
		親しみを持てるようになった	・親しみを感じた ・親しみやすくなった ・身近に感じた ・何度か来て親しみが持てるようになった ・親しみやすさがUPした ・参加するたびに先生や学生さんたちと関わって親しみが増して来た
		大学の「場」としての役割が変わった	・いつ来てもとても楽しい時間が過ごせる場所である ・子どもと一緒に遊べる場所があるということはとても強い
		知ることでイメージが変わった	・こんな地域に密着しているとは思わなかった ・様々な取り組みをしている ・地球に根拠差しているイメージを持った ・乳幼児向けのイベントをよくしている
		今後も大学とつながりたい	・また来たい ・今後もイベントがあれば参加したい ・とても楽しくもっとこのように参加したい ・学祭などイベントがあればきたい
		自分も大学に協力したい	・赤ちゃんを色々な方に触れさせたい

以下、各カテゴリーについて説明する。尚、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを《 》、コードを「 」で示した。

1) クラス参加前の大学に対するイメージ・思いについて

参加者らは、クラスに参加する前に大学に対するイメージ・思いは、【入りにくい場である】【国際的である】【大学の環境が整っている】【身近に感じている】という4つのカテゴリーから構成されていた。

【入りにくい場である】は、《場所・構造的に入りにくい》《自分は対象外である》《大学を訪れる機会がない》《入って良いのかわからない》《子ども連れで来る場所ではない》《意識にない》という6つのサブカテゴリーが見いだされた。

本学が建っている場所は幹線の道路から離れ、田園の中で隣接する建物がなくキャンパスが構成されていることから陸の孤島の様相を呈している。そのため車の利用が多く、普段は人が歩いて通る場所ではない環境にあり、参加者らは、「車で来なければ入れない（Bさん）」、「塀で囲まれているので中が見えず、入口が入りづらい雰囲気だ（Dさん）」というように、《場所・構造的に入りにくい》と感じているということがわかった。

また、大学は教育機関であり勉強するところなので、社会人である自分たちが行く場所ではなく、「学生が多く、一般人は入れないと思っていた（Aさん）」というように、《自分は対象外である》と考えており、「(大学のことはそもそも)あまりよく知らない（Cさん）」とそもそも《意識にない》状態であった。そのため、Dさんのように「きっかけが無いので来る機会がない場所だ」と《大学を訪れる機会がない》、「入ってみたいけど入って良いのかわからなかった（Cさん）」というように《入って良いのかわからない》と思っていた。また、Bさんのように「子どもがうるさくて迷惑がかかる」と普段の生活でも子どもがうるさくて周りに迷惑がかかると思っている母親が多い現状がある中、参加者らも大学は《子ども連れで来る場所ではない》と考えていた。

また、本学は国際大学であり、多くの留学生が在籍している。そのため、参加者の住んでいるところでも多くの留学生を見かけることが多いと思われ、【国際的である】は、「外国人の学生が多い（Bさん）」ことから、《留学生が多い》というサブカテゴリーから構成されていた。

【大学の環境が整っている】は、「きれい、明るい、広い（A、C、Dさん）」というように、《構内の印象が良い》から構成されおり、参加者は本学に対して以下のイメージを持っていた。また、【身近に感じている】は、「職場にインターンシップで（本学の）学生が来るので身近に感じている（Dさん）」ということから、《インターンシップでの繋がりがあ

2) クラスに参加後の大学に対するイメージ・思いについて

参加者のクラス参加後の大学に対するイメージ・思いは、【体験を通してイメージが変わった】【知ることによってイメージが変わった】【今後も大学とつながりたい】という3つのカ

テゴリーから構成されていた。

【体験を通してイメージが変わった】では、《大学の環境は思っていた以上に整っていた》《学生・教員の優しさ、頑張りを実感した》《大学に来やすくなった》《親しみを持てるようになった》《大学の「場」としての役割が変わった》の5つのサブカテゴリーが見いだされた。

参加者らは、実際に大学に足を運び、大学の物理的環境に身を置くことで、「バリアフリーが充実していた。施設も利用しやすかった（トイレ・エレベーター・室内など）（Dさん）」、「赤ちゃん向けのスペースがあってびっくりした（Eさん）」というように、《大学の環境は思っていた以上に整っていた》と様々なことを実感していた。

また、教職員・学生らとの関りを通して、「参加するたびに先生や学生さんたちと関わって親しみが増して来た（Cさん）」、「学生が優しく対応してくれ、頑張っているなと思った（Aさん）」というように、《学生・教員の優しさ、頑張りを実感した》のち、「気楽にきてもよいとわかった（Aさん）」、「何度か来て親しみが持てるようになった（Dさん）」と《大学に来やすくなった》《親しみを持てるようになった》など、大学に対する思いがポジティブな方向に変化していた。さらに、「いつ来てもとても楽しい時間が過ごせる場所だ（Aさん）」、「子どもと一緒に避難する場所があるということはとても心強い（Cさん）」と《大学の「場」としての役割が変わった》というように、いままで抱いていた大学の「場」のイメージとは違う「役割」というイメージを持つに至った。

次に【知ることでイメージが変わった】は、いままでは大学の活動について知らなかったが、今回クラスに参加し、「こんな地域に密着しているとは思わなかった（Eさん）」、「地球に根差しているイメージを持った（Bさん）」というように、《大学がおこなっている活動を知った》ことで、【今後も大学とつながりたい】という思いが強くなり、「今後もイベントがあれば参加したい（Aさん）」、「学祭などイベントがあればきたい（Eさん）」と、《今後も大学のイベントに参加したい》という思いに変化していった。

さらに、ボランティアとして参加した学生は助産師課程、保健師課程の学生が多かった。普段乳幼児と接する機会が少なく、実際の乳幼児に対する関心が高い学生らの対応にBさんは、「学生さんと触れ合うことができとても良かった」という思いを抱き、Aさんは「赤ちゃんを色々な方（学生）に触れさせてあげたい」と《自分も大学に協力したい》という思いを抱くまで変化していた。

V. 考 察

1. クラス参加前の本学に対するイメージ・思いについて

参加者らのクラスに参加する前の本学に対するイメージや思いは、キャンパスの立地条件から、《場所・構造的に入りにくい》イメージが強いことがわかった。また、大学という“場”

は、教育機関であり、すでに教育を終え社会人として生活している自分にとって関係のないところ、対象外と考えていた。そのため、大学を訪れる機会もなく、キャンパスに入っても良いかどうかはわからないと思っていた。また、子どもは泣いたり騒いだりするため、多くの母親らは普段の生活でも他者に迷惑をかけないように気を使って過ごしている。その子どもを連れてくる場所として大学は考えられなかった。これらのことから、母親である参加者にとって、大学は自分たちの日常生活の中で身近というより、意識されない存在であることがわかった。しかし、留学生を見かける、キャンパスの近くを通る、本学の学生とインターンシップで接したことがあるなど、自分たちの日常生活の中で目にする、または接する機会などがあると、本学に対して【身近に感じている】というように身近かな存在として感じやすいと思われる。

以上のことから、本学で災害時に母子支援を行いたいと考えていたが、本学は母子にとって物理的に来やすい場所ではないことがわかった。さらに、大学という場も社会人や子どもを持っている母親にとって、興味・関心がもてない理由も知ることができた。そのため本学で何かを開催する場合は、これらの条件や状況を考え、交通手段の提供や駐車場の手配、大学のホームページでの掲示だけでなく一般の人でも目にしやすい情報提供の工夫などを行う必要があると考える。また、母子が対象の場合は、託児施設の有無や子どもを連れてきてても良いことなどを知らせることも重要であることがわかった。

本学の学生と接した経験がある参加者は、本学を身近に感じていた。接した経験の有無もイメージや思いの変化に大きく影響するため、地域の母子と関わる機会を持つということは関係づくりには非常に有効であると思われる。

2. クラスに参加後の本学に対するイメージ・思いについて

本学で開催されたクラスに参加することで、実際にキャンパス内・校舎に入る体験を通して、「バリアフリーが充実していた。施設も利用しやすかった（トイレ・エレベーター・室内など）」や「赤ちゃん向けのスペースがあってびっくりした」などと実感していた。本学に来る回数が増すことで本学の物理的環境を知る機会となり、「よい意味で（大学に来る）ハードルが下がった（Eさん）」というように思いが変化していた。また、「参加するたびに先生や学生さんたちと関わって親しみが増して来た（Cさん）」というように、学生や教職員と接する機会が多くなることで、学生や教職員の人となりを知ることになり、「《学生・教員の優しさ、頑張りを実感した》という思いを抱き、親しみを持てるというように思いが変化していた。これらの思いの変化に伴い「いつ来てもとても楽しい時間が過ごせる場所だ（Aさん）」、さらに、本学が行っている活動を知ることによって「地球に根差しているイメージを持った（Bさん）」というように、本学に対するイメージも変化していた。また、「今後もイベントがあれば参加したい（Aさん）」と積極的に本学とのつながりを継続したいという思いを抱いたり、「赤ちゃんを色々な方（学生）に触れさせてあげたい（Aさん）」と自ら本学に協力したいと希望する

思いを持つに至った参加者もいた。

以上のことから、実際に「場」に来ることで、どのような場や雰囲気なのか場を知ること
で慣れることにつながり、大学に来ること、いることに緊張感や不安を抱かなくなると考え
る。また同じように、「人」と直に接する経験の中で、時間と共に緊張感や不安も軽減されて
いき、人に慣れていくと思われる。さらに、教職員や学生の一生懸命な態度や優しさから、
親しみやすさや温かさが増し、もっと見てみたいやまた参加したいなど、参加者自ら関係性
を継続したいという思いにつながっていった。関係性継続のためには、人と関わる回数だけ
でなく、良好な関係づくりができる関わり方も重要だと思われる。

クラス開催期間中に行われた本学の学祭に、インタビューに応じた参加者以外のクラスに
参加していた母子らの姿も多くみられた。本学に来て本学の人と接する経験が、本学の「場」
や「役割」ということを知る機会となり、次に来る、または参加する機会に大きく結びつく
ということがわかった。

3. クラス開催と地域母子との顔の見える関係づくりについて

近年、地域連携において「顔の見える関係」の重要性について強調されている(黒瀬, 2007)。
本研究では、クラスへの参加を通して災害時に備え平時から地域母子との顔の見える関係づ
くりが可能かを明らかにすることを目的とした。森田ら(2012)は、地域緩和ケアにおける
顔の見える関係を、「顔の見える関係とは、単に、名前と顔が分かる関係ではなく、考え方や
価値観、人となりが分かる、さらには、信頼感をもって一緒に仕事ができる」と定義してい
る。この定義を本研究に当てはめて考えてみると、クラスへの参加を通してお互いに名前と
顔が分かっただけでなく、学生や教職員と直に接する機会を重ね、その人となりを知ること
で親近感や親しみを抱くようになっていた。さらに、自ら自分の子ども(赤ちゃん)を学生
に触れさせたいという思いは、信頼関係がなければ発しない言葉だと思われる。信頼関係を
築いた上で自分も本学に協力したい、親しみが増しもっと継続してつながりたいというこれ
らの思いは、「信頼感をもって一緒に仕事ができる」の部分を「信頼感をもって一緒に何かを
したい」というように置き換えることができると考える。

以上のことから、本学で開催するクラスに参加することで、本学に対するイメージや思い
を変化させ、その変化や思いは地域母子と「顔の見える関係づくり」を構築する一助となり
得ると考える。

本研究の限界と課題

本研究では、短期間に連続して4回開催したクラスを受講している方を研究の参加者とし
たこと、5名と少ない人数であったことで密に接することとなり、イメージや思いの変化、関
係性の構築が容易であったと考えられる。そのため、クラス開催の回数だけでなく、開催す
る間隔、対象にする人数についても検討する必要があると思われる。

また、クラスに参加する人数そのものも多くなく、研究に参加する者が少なかった。そもそも大学は母親らにとって来やすい場所ではなく関心も薄かったため、大学でクラスを開催していることの周知が不十分だったと思われる。周知の方法・期間についても今後検討し、研究参加者を増やして分析する必要があると考える。

VI. 結 論

研究結果より、本学のイメージは入りにくい雰囲気強いことがわかったが、実際に本学に来てもらい、「人」や「物・場所」との直接的関わりを通して本学のイメージを変化させ、顔の見える関係づくりができることがわかった。

謝 辞

本研究にご協力してくださった研究参加者の皆様、東金市役所市民福祉部健康増進課の皆様、ひまわり助産院の的射場久子先生、的射場亜希子先生に心より感謝申し上げます。

本研究は平成 30 年度学長所管研究の助成を受けて実施した。

利益相反

論文内容に関し、開示すべき利益相反の事項はない。

【文献】

越田美穂子 (2017). 災害時における母子保健活動. 地域保健の視点から. *Journal of Kagawa Society of Maternal Health*, 17(1), 4-12.

黒瀬正子 (2007). “顔の見える関係”が結ぶ看護連携. *看護*, 59 (12), 47-50.

森田達也, 野末よし子, 井村千鶴 (2012). *Palliative Care Research*. 7(1), 323-333.

清水清美, 飯田加奈恵, 宮澤純子, 大野佳子, 佐々木美喜, 山田万希子, 飯島亜樹, 高田良子 (2017).

「災害時の母子支援」本学が地域に貢献できること. 学長所管研究奨励研究報告書.

村山洋史, 春名めぐみ, 村嶋幸代, 吉岡京子, 永田智子 (2004). 地域母子事業の継続と発展の要因. *日本地域看護学誌*. 6 (2), 55-61.